

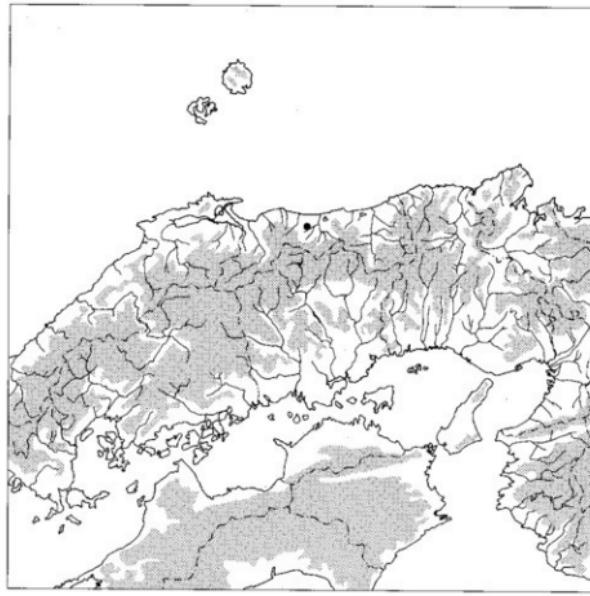


河原毛田遺跡発掘調査報告書

平成9年度

倉吉市教育委員会

かわらけだ
河原毛田遺跡発掘調査報告書



遺跡略号 6WKK

平成9年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572825

序

この報告書は、平成9年度に、社コムニティセンター建設事業に伴う事前調査として、鳥取県倉吉市国分寺字河原毛田において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回、調査し報告します河原毛田遺跡は、倉吉市街地の西郊に位置し、大山火山灰によって形成された久米ヶ原丘陵東端に所在します。この地区は、奈良時代になると伯耆国衙・伯耆国分寺・伯耆国分尼寺と推定される法華寺畠遺跡が近接して設けられ、伯耆国の政治・経済・文化の中心地として推移した地区です。調査では奈良時代から平安時代の方向性をもつ溝を数条発見しました。これらの溝の中には伯耆国府に関連すると思われるものがあり、伯耆国府解明の貴重な資料を得ることができました。

発掘調査にあたりましては、ご協力いただきました地元の方々をはじめ、現場作業に従事していただいた方々に対し厚くお礼を申し上げますとともに、関係各位に対し深く感謝の意を表すものです。

最後に、本書が広く研究の一資料としてご活用され郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

平成10年3月

倉吉市教育委員会
教育長 足羽一昭

例　　言

1. 本報告書は平成9年度に倉吉市教育委員会が、社Communityセンター建設事業に伴う事前調査として、鳥取県倉吉市国分寺字河原毛田において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 発掘調査団は次のような組織・編成である。

團　長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

手嶋 義之（倉吉市文化財保護審議会委員）

調査員 根鈴 雄輝（倉吉博物館学芸員） 滝田 康幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）

森下 哲哉（文化財係主任） 根鈴智津子（文化財係主事）

加藤 誠司（文化財係主事） 岡本 智則（文化財係主事）

岡平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子

事務局 石田佐喜子（教育次長 9月まで） 新田 征男（教育次長 10月から）

生田 敦美（文化課課長） 福澤 昌子（文化財係主事）

山崎慎之介（文化財係主事） 金田 朋子（臨時職員）

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松嶋あつ子・竹歳 晚子・山崎有香子

3. 現場での調査は森下が担当した。造構の図面整理は森下・松田が担当した。遺物実測は森下が担当した。遺物写真は森下・岡平が担当し、松嶋・竹歳・山崎が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が担当した。

4. 本書の執筆は、森下が担当した。編集は松田・世浪が担当した。

5. 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」「関金宿」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成9年度修正測量の1:2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

6. 採図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第V座標系の北を示す。

7. 遺物に付した記号・番号は、本文・採図・図版で統一している。

8. 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	4
1	遺構	6
2	遺物	8
IV	まとめ	10
報告書抄録		

挿図目次

第1図	倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	河原毛田遺跡調査区位置図	4
第3図	河原毛田遺跡遺構全体図	5
第4図	遺構平・断面図	7
第5図	落し穴・土壤遺構図	8
第6図	出土遺物図	9
第7図	伯耆国府域における字限図	11

図版目次

図版1	遺跡 調査区遠景 調査区全景
図版2	遺跡 調査区から東を望む 調査区から西を望む
図版3	遺構 SD01 1号・2号水路
図版4	遺構 3号水路 落し穴
図版5	遺物 土師器・須恵器・瓦質土器
図版6	遺物 陶磁器・瓦・砾石

I 発掘調査に至る経過

河原毛田遺跡は、倉吉市教育委員会が「社コミュニティセンター（社公民館）」建設予定地を発掘調査した結果、発見した遺跡である。

平成8年12月、倉吉市教育委員会社会教育課から、社コミュニティセンター（社公民館）建設計画に伴い、倉吉市国分寺字河原毛田地内における埋蔵文化財の有無の問い合わせがあり、合わせて試掘調査の依頼があった。この予定地は、史跡伯耆国分寺跡歴史公園から約150m南に下がった久米ヶ原丘陵裾部の水田に位置し、この周辺は奈良時代に伯耆國府がおかれて伯耆國の行政・文化の中心地であった。

倉吉市教育委員会文化課は、こうした立地的な条件を踏まえて、遺跡の存在の有無を確認するため、国・県の補助金を受け平成9年4月から5月にかけ試掘調査を実施した。その結果、伯耆國府に関連すると思われる奈良時代の土師器や瓦とともに、方向性をもつ溝を数条検出し、遺跡の存在が明らかとなった。

試掘調査をもとに倉吉市教育委員会文化課は、社会教育課と協議し建物範囲900m²について発掘調査を実施することになった。調査は、倉吉市教育委員会文化課が主体となって平成9年9月22日から平成9年10月23日まで現地調査を実施した。

II 位置と歴史的環境

河原毛田遺跡は、倉吉市街地の西郊約3kmに位置し、史跡伯耆国分寺跡歴史公園から南に150m離れた倉吉市国分寺字河原毛田の水田に所在する。奈良時代から平安時代に至る瓦や土師器が出土した溝と条里制に当たる水路を検出した遺跡である。そこは、天神川の支流国府川の左岸で国分寺集落の南側の最近まで条里の跡を残していた水田であり、南西から北東方向に延びた標高30mの久米ヶ原丘陵東端南側裾部にあたる。この久米ヶ原丘陵は、大山の火山活動によって形成された洪積性の丘陵で、なだらかな起伏をもって広がり、丘陵の小さな谷間には湧水がみられ、浸食作用によって形成された細長い谷が樹枝状に入り組む。こうした低丘陵上には遺物散布地や古墳群などの遺跡が数多く存在する所として知られている。またこの地区は、奈良時代の行政区画では久米郡八代郷にあたり伯耆國衙をはじめ伯耆國分寺や伯耆國分尼寺が所在した伯耆國の文化・行政の中心地であった。

この地区における発掘調査は、1969年の道路改良工事に端を発した伯耆國分寺跡の発掘調査にはじまる。そして伯耆國分尼寺跡（法華寺跡・1971～1974年）・伯耆國衙跡（1973～1978年）と続き伯耆國府の中心部が明らかにされた。そして道路改良工事や畠・水田の各種は塁整備事業によって遠藤谷峯遺跡（1970年）・中峯遺跡（1971年）・櫛塚遺跡（1970・1978・1982年）・宮ノ下遺跡（1976・1978年）・沢ベリ遺跡（1975・1994～1995年）・今倉遺跡（1982年）・イザ原古墳群（1982年）・打塚遺跡（1983年）・中尾遺跡（1991年）・不入岡遺跡（1993～1994年）・古神宮古墓（1995年）など、旧石器時代から縄文・弥生・古墳・歴史時代にわたる古代遺跡が発掘調査されている。倉吉市内において最も歴史的解明が進んでいる地区である。

鳥取県のはば中央部に位置する倉吉市には、現在まで約3,000箇所にものぼる遺跡が確認されており、中でも今回調査した河原毛田遺跡の所在する国府川の左岸一帯の久米ヶ原丘陵は遺跡が濃密に分布する。第1図の範囲での様子を見てみると、古墳時代を中心として旧石器時代から歴史時代にいたる数多くの遺跡が分布する。

しかし旧石器時代や縄文時代の遺跡は少なく、ナイフ形石器や縄文時代の落し穴を検出した中尾遺跡（22）、中期や晩期の土器散布を確認した平ル林遺跡（39）があるだけである。

この地区における遺跡の増加は、弥生時代中期からみられはじめ、集落を中心に久米ヶ原丘陵上に営まれるようになる。これにあわせて墳墓も丘陵尾根上に造られはじめる。集落跡では遠藤谷峯遺跡・白市遺跡・中峯遺跡・沢ベリ遺跡(27・28)・西前遺跡(35)などが知られ、墳墓ではイキス遺跡・大谷後口谷墳丘墓(6)・三度舞墳丘墓(29)・柴栗古墳群(32)が知られる。

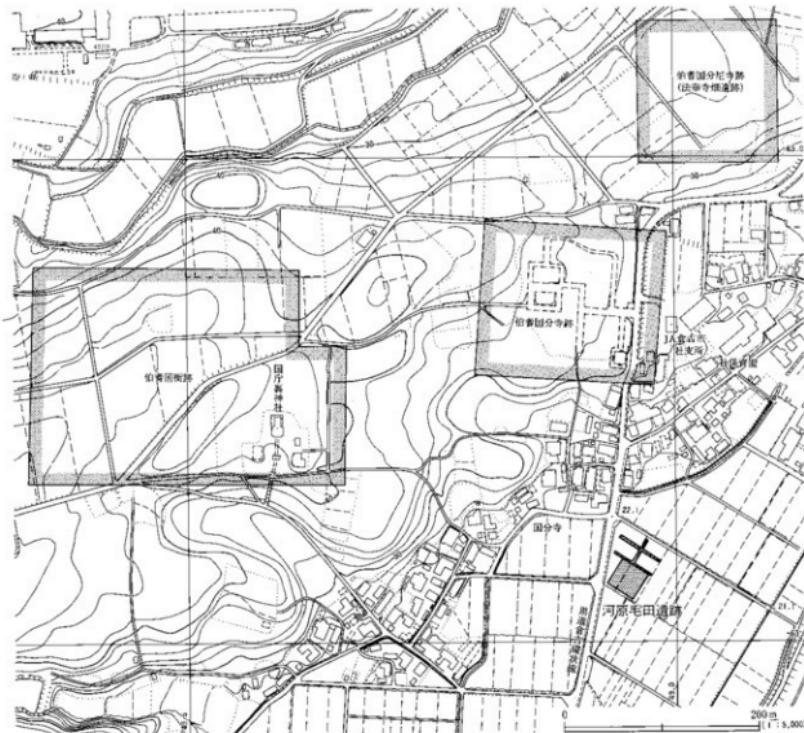
古墳は、4世紀初頭に築造されたと推定される国分寺古墳(20)からはじまる。国分寺古墳は全長60mの前方後方(円)墳であり、主体部の粘土塚内から三角縁神獣鏡・蔓鳳鏡・神獸鏡・多量の鉄器が出土している。現在のところ山陰で最も早く造られた大型の前方後方(円)墳と言われている。国分寺古墳以降では円墳であるが三角縁神獣鏡・鍼形石・琴柱形石製品が出土した上神大将塚古墳(33)、全長50mの前方後円墳の大谷大将塚古墳(24)がある。さらに4世紀代には方墳からなる猫山遺跡(34)や中峰古墳群(38)があり、5世紀代には円墳からなるイザ原古墳群(26)・屋喜山古墳群(31)や造出し付き円墳からなる沢ベリ遺跡2次(28)などが四王寺山東側に形成される。古墳時代後期では、向山・四王寺山周辺・上神周辺・大平山周辺などの丘陵に群集墳が形成される。7世紀代には小型の横穴式石室を有する古墳群の取木遺跡(1)や両長谷遺跡があり、大型の切り石造りの三明寺古墳や福庭古墳が存在する。

奈良時代では、倉吉市西郊の国府・国分寺地区に伯耆国衙(13)・国分寺(14)・国分尼寺(15)が近接して設けられる。いずれも発掘調査が実施され内容が明らかにされている。中でも伯耆国衙は、從来伯耆国の總社といわれる国府裏神社の南側水田に想定されていたが、昭和44年の伯耆国分寺跡の発掘調査をきっかけに標高40mの久米ヶ原丘陵上に存在することが明らかになった。これまでの発掘調査によって四方を溝で囲まれた東西273m、南北227mの長方形に区画され、さらに東辺には東西51m、南北149mの張出部が設けられていることが確認されるなど、国衙跡の具体的な内容が明らかにされている。さらに国府川に沿った不入岡地区には、伯耆国の物資収納施設と推定された大型掘立柱建物群を検出した不入岡遺跡(21)が所在する。そして向山丘陵の西側には円面鏡等を出土した大型の掘立柱建物を検出した平ル林遺跡がある。平安時代になると、久米ヶ原丘陵の北側に所在する四王寺山山頂に四天王像を祭る四王寺が建立される。



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

1 取木遺跡	10 鳴ノ掛瀬跡	19 櫛塚遺跡	28 沢べり遺跡(2次)	37 和田城跡
2 一反半田遺跡	11 今倉城跡	20 国分寺古墳	29 三度舞墳丘墓	38 中峰古墳群
3 四王寺跡	12 今倉遺跡	21 不入岡遺跡	30 星喜山9号墳	39 平林遺跡
4 大谷城跡	13 伯耆国衝跡	22 中尾遺跡	31 星喜山古墳群	40 高峰古墳群
5 古墳群	14 伯耆国分寺跡	23 大谷古墳群	32 萩原古墳群	41 茂才寺1号墳
6 大谷後谷墳丘墓	15 伯耆国分尼寺跡	24 大谷大将塚古墳	33 上神大将塚古墳	42 赤岩古跡
7 向野遺跡	16 宮ノ下遺跡	25 小林古墳群	34 上神猫山遺跡	43 四十二丸城跡
8 岩屋遺跡	17 古神宮古墓	26 イサ原古墳群	35 西前遺跡	44 北ノ城城跡
9 矢戸遺跡	18 打塚遺跡	27 沢べり遺跡(1次)	36 夏谷遺跡	

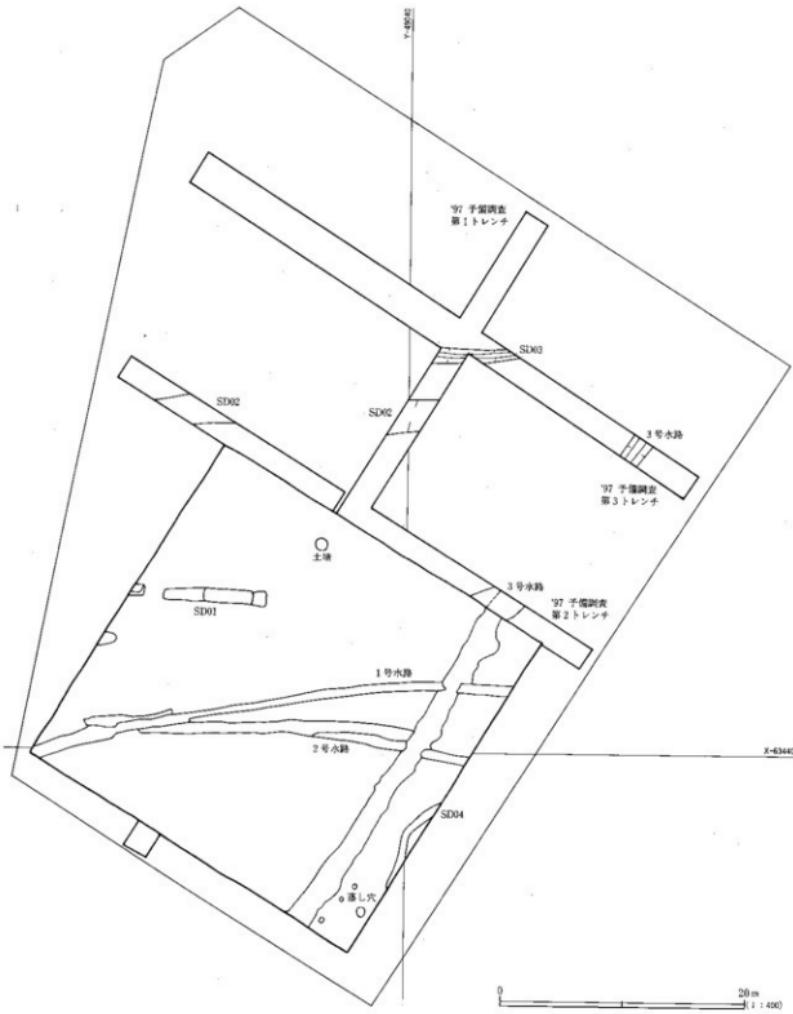


第2図 河原モリ遺跡調査区位置図

III 調査の概要

今回の調査は、伯耆国分寺跡の南側に計画された社コミュニティセンターの建物範囲という限られた範囲を調査した。発掘調査面積は900m²である。調査方法は、水田の耕作土を取り除いたあと、調査区内に幅3mのグリッドを設定して掘り下げた。調査地の基本層序は上層から、I 表土（耕作土）・II 床土・III 黒褐色土・IV 暗茶褐色土（漸移層）である。遺構の検出は第IV層の上面でおこなったが、不明確な東側部分では黄灰色砂質土（上のホーキ火山砂層）まで掘り下げて検出した。

調査の結果検出した主な遺構は、溝2条と水路3条、そして土壙1基と落し穴1基であった。なお、予備調査で検出した溝2条についても一連の遺構と考えられるものであり、あわせて報告する。



第3図 河原毛田遺跡遺構全体図

1 遺構

S D 01 調査区北西側で確認した、東西にはほぼ直線状に延びる溝である。幅1m程度で深さは0.2m前後あり、長さ8.5mにわたって検出した。主軸はN-93°10'-Eの振れが認められる。断面は、ゆるやかで幅の広いU字形を呈し、その高低差は西が高く東が低い状況である。埋土は黒褐色土と黒茶褐色土であり、いずれも灰色粘質土を含むものであった。埋土中から土師器壺他小片が出土した。

S D 02 (予備調査) 予備調査の第1トレンチ及び第2トレンチで確認したほぼ東西に延びる溝である。幅2.5m程度で深さは0.3~0.5mを測る。断面はゆるやかで幅の広いU字形を呈し、その高低差は西が高く東が低いものであった。埋土は灰色粘質土を含む黒茶褐色土であった。主軸はN-92°-Eの振れが認められるものの、トレンチによる部分的な確認であり曲がる可能性も残る。埋土中からの出土遺物は確認しなかった。

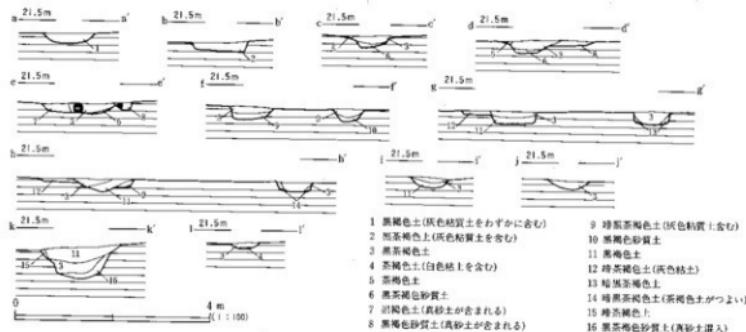
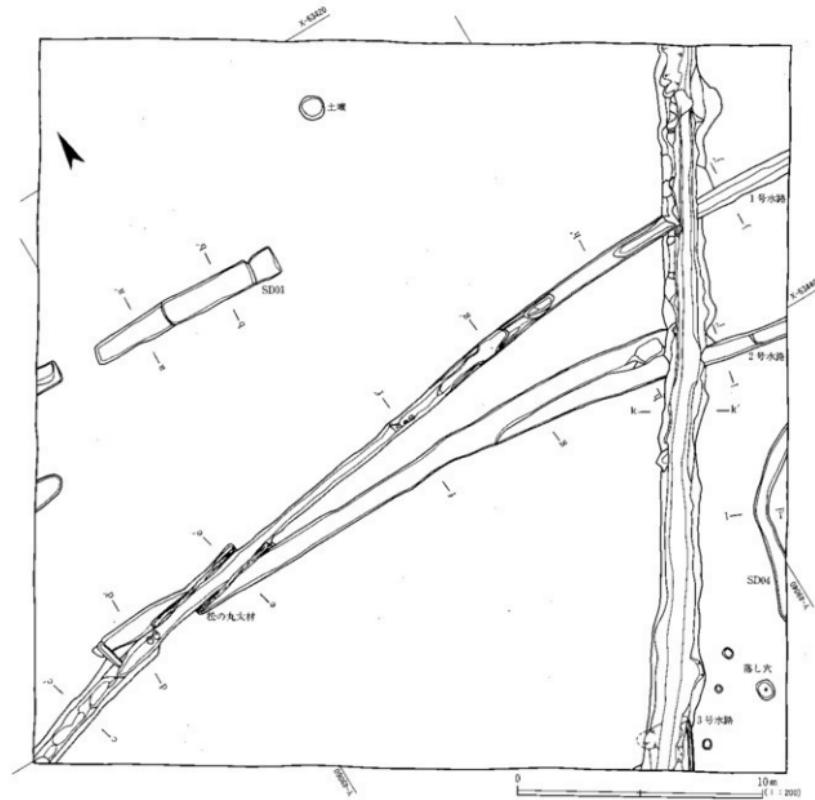
S D 03 (予備調査) 予備調査の第1トレンチ及び第3トレンチで確認した。S D 02の北側に、ほぼ平行するように東西に延びる溝である。幅1m前後で、深さは0.3mを測る。断面はゆるやかなU字形を呈する東西溝であり、埋土は灰色粘質土を含む黒茶褐色土であった。主軸はN-88°-Eの振れが認められる。第3トレンチ付近ではやや不明瞭になるものの、その高低差は西側が高く東側が低い状況であった。埋土中からの出土遺物は確認しなかった。

S D 04 調査区の南東側隅で確認した曲線状に延びる溝である。幅0.7m程度、深さは0.1m前後で、長さ約8mを検出した。この溝は、他のS D 01からS D 03までの3本の溝のように直線状に延びておらず、その性格が異なるものと思われる。出土遺物はなかった。

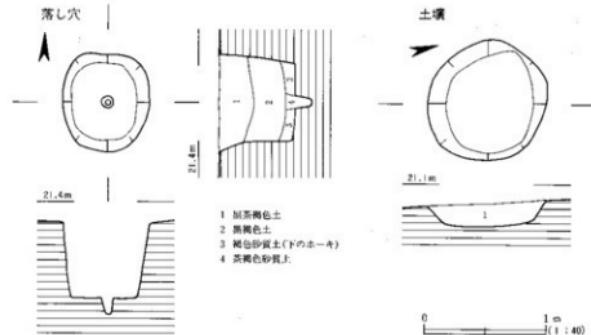
1号水路 調査区の中央を、ほぼ東西に延びる水路である。検出状況から1号水路のすぐ南側に位置する2号水路から付け替えられたものと判断できる。最大幅1.1m前後で、深さ約0.3mを測り、長さ41mを検出した。水路の両側に細い杭が打たれる。調査区の西から10m付近には、直径約20cm前後で長さ4mの松の丸太材が水路肩に沿って平行に設置されており、道路や橋、畦道など何らかの施設が存在した可能性が考えられる。断面はゆるやかな幅広のU字形を呈しており、底部には砂が厚さを変化しながら堆積しており、水の流れた痕跡をとどめる。床面の高低差は東側が高く西側が低い状況を呈する。主軸は、調査区中央部で大きく湾曲しており計測は不可能である。埋土中から土師器壺や皿等の小片が出土した。

2号水路 調査区のほぼ中央、1号水路の南側を東西に延びる水路である。検出状況から1号水路以前の水路と考えられる。最大幅1.3m、深さ0.2m前後を測り、長さ32mを検出した。西から6m付近では1号水路と2号水路が重なる部分があり、水路の付け替えがあったものと判断できる。断面はゆるやかな幅広のU字形を呈し、埋土は黒茶褐色土で底部には砂が堆積し、水の流れていた痕跡をとどめる。床面の高低差は東側が高く西側が低い水路であった。埋土中からの遺物は、小片の土師器や陶器片が出土した。

3号水路 調査区の南東側を、南西から北東に延びる水路である。検出状況から1号・2号水路よりも古い水路と考えられる。最大幅1.8m、深さは0.7m前後で、長さ30mを検出した。断面はゆるやかなU字形を呈するが、底部周辺には大小の穴があき、中にはやや粒子の粗い砂が詰まっていた。埋土は黒褐色土や黒茶褐色土からなり、底部付近では真砂土や砂が比較的厚く堆積し、水の流れていた痕跡をとどめる。床面の高低差は南西側が高く北東側が低いものであった。埋土中から土師器壺棺片や陶器片・瓦器片などが出土した。



第4図 造構平・断面図



第5図 落し穴・土壤造構図

落し穴 調査区の南側隅で確認した。平面形は検出面・底面とも不整形な楕円形を呈する。断面形は一部形が崩れるものの、ほぼ垂直に底面に続く。規模は長軸80cm・短軸72cm、深さは中央部で62cmを測る。底面の中央には杭痕跡のピットが1個存在する。規模は径9cm、深さは13cmである。出土遺物はなかった。

土壤 調査区の北側で確認した。平面形は不整形な円形で、中央部が緩やかにくぼむ。規模は径1m、深さ0.2mであった。出土遺物はなく、性格は不明である。

2 遺物

今回の調査において出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・瓦、砾石、そして五輪塔水輪であった。このうち最も多く出土した土器類と瓦類はいずれも小片で器形を復元できるものは少なく、また造構に伴う遺物は非常に少なかった。造構に伴う遺物は、SD01・SD02と3号水路から出土するだけである。以下、造構順にその概要を述べる。

SD01

土師器環B（1） 口縁部を欠く高台付の環。高台は底部外縁より内側に貼り付けられ、外方に張り出す。底部外面にヨコナデ調整を施す。彩色は無い。底径8.6cm。

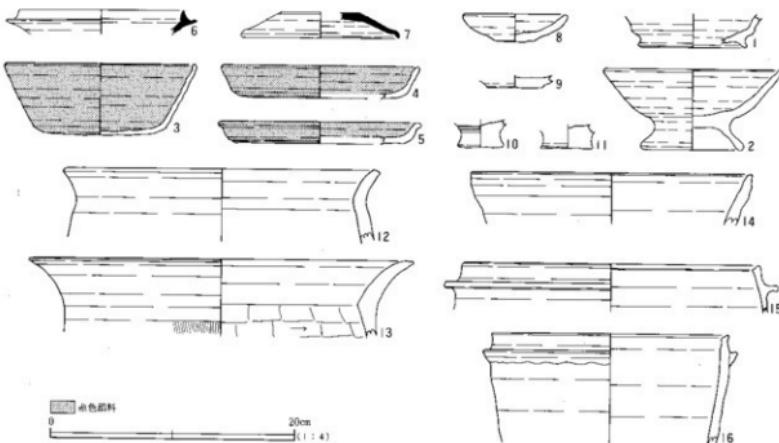
SD02

土師器環B（2） 大型の高台付環。上外方へ大きく開く口縁部からなり、口縁部には成形時の引き上げで生じたロクロ目状の凹凸があり、底部は糸切り痕は認められないがロクロ製の可能性も考えられる。高台は端部を丸くおさめるもので、外方に大きく開く。彩色は無い。口径14.2cm、器高6.6cm。

3号水路

土師器環A（3） 器高が高く、口径が15cmを越える大型の環。上外方へ立ち上がる口縁部は、端部が僅かに内湾気味に丸くおさめる。底部はヘラ切り後ナテ調整し、中央部分は未調整のまま。赤色塗彩あり。口径15.4cm、器高5.9cm。

土師器皿（4・5） 口径15cm前後の皿で、やや器高が高いもの（4）と低いもの（5）がある。5は上外方に短く開き、端部を丸くおさめる。底部はヘラケズリ調整を施す。4は器高が低く、口縁端部が外方に折り返され面をもつ口縁部からなる。底部はヘラ切り後ナテ調整する。いずれも赤色塗彩する。口径は4が16.3cm、5が15.9cm。



第6図 出土遺物図

造構外

須恵器環身（6） 口縁部片。立ち上がりは短く、断面は三角形を呈する。受部は水平方向にのびる。小片ながら全体に浅く扁平を呈するものと思われる。口径16.3cm。

須恵器蓋（7） 天井部が欠けているものの宝珠形のつまみを持つものと考える。平坦な頂部とくの字形に外反する口縁部からなる。端部は内側に折り返される。口縁部をヨコナデ調整に、頂部をヘラケズリする。口径は12.6cm。

土師器坏A（8・9） ロクロ製の小型の坏。上外方に開く口縁部と回転糸切りによる底部からなる。口縁部内外面はヨコナデ調整。8は口径8.0cm、器高2.3cm。9は底径4.5cm。

土師器台付皿（10・11） ロクロ製の円柱状の台を有する皿で、皿部を欠く。約2cmの円柱状の台を有し、底部は10がヘラ切り未調整で、11が回転糸切りによってそれぞれ切り離される。底径は10が4.2cm、11が3.4cm。

土師器甕（12～14） 瓢は残りが悪く、口縁部の小片で全体を復元できるものはなかった。12・13は口縁部がくの字形に外反し、13は口縁端部がとがる。14は上外方に開く口縁部で、端部がヨコナデによりやや立ち上がり気味になる。口径はそれぞれ25.0、31.3、23.0cmである。

瓦質土器羽釜（15・16） 口縁部の小片。口縁部が内傾しながら立ち上がり、つばが横方向にのびるもの（15）とゆるく外反しつばがやや上外方に貼り付けられるもの（16）がある。胎土は15が須恵質に近く、16が土師器に近い。いずれも外面模が付着する。口径はそれぞれ24.0、19.2cm。

丸瓦・平瓦 調査区のはば全域で、床下下層から約40点近く出土した。いずれも小片で、摩耗が激しい。

砥石 調査区の造構検出面から3点出土した。いずれも小型で、すべて両面を使用したものであった。中でも一番小さい砥石は上下面さらに両側面の4面すべて砥いでいる。大きさは6.1～2.1cm、厚さ1.5～0.4cm。

五輪塔 調査区北側の造構検出面より水輪1点出土した。平面形が不整形な円形で、やや扁平な形態を有する。大きさは長径25.1cm、短径22.1cm、高さ13.5cmを測る。

IV まとめ

今回の調査で検出した遺構は、溝2条・水路3条・土壙1基・落し穴1基と数が少なかった。このうち溝と水路について、それぞれ概要を述べまとめてとする。

溝

検出した溝はSD01とSD04の2条である。このうちSD01は、主軸がN-93°10'-Eの方向にはば直線状に延びる東西溝で、幅1m・深さ0.2m、長さ8.5mを検出した。断面はやや底面の広いU字状で、埋土からわずかに土器片が出土した。溝は、西側で延長部分と思われる掘り込みを残すが、東側は水田による削平が著しく遺存状況は悪かった。時期は、出土した土器片が伯耆国出土土器編年版の第3段階に比定できるところから、10世紀前半ごろには存在した可能性がうかがえる。この溝は、その方向性や規模から予備調査で検出したSD02と平行関係がみられた。SD02は、SD01の北側13.5mに所在し、主軸がN-92°-Eの方向に延びる東西溝であり、幅1.3mを測るものであった。2つの溝の心々距離は約15mを測る。SD01とSD02は、主軸に1°の違いがあり、直線的には平行なものとは言えないが、変化を見せながら平行関係をもち東西方向に延びるものと考えられる。この溝の間は水田による削平が著しく遺存状況が悪いため、「叩きしめ」など硬化状況は確認できなかつた。このような状況の中で溝の性格を考えるなら、平行する2条の溝がほぼ直線状に東西に延びるところから道状遺構に伴う側溝の可能性が高い。

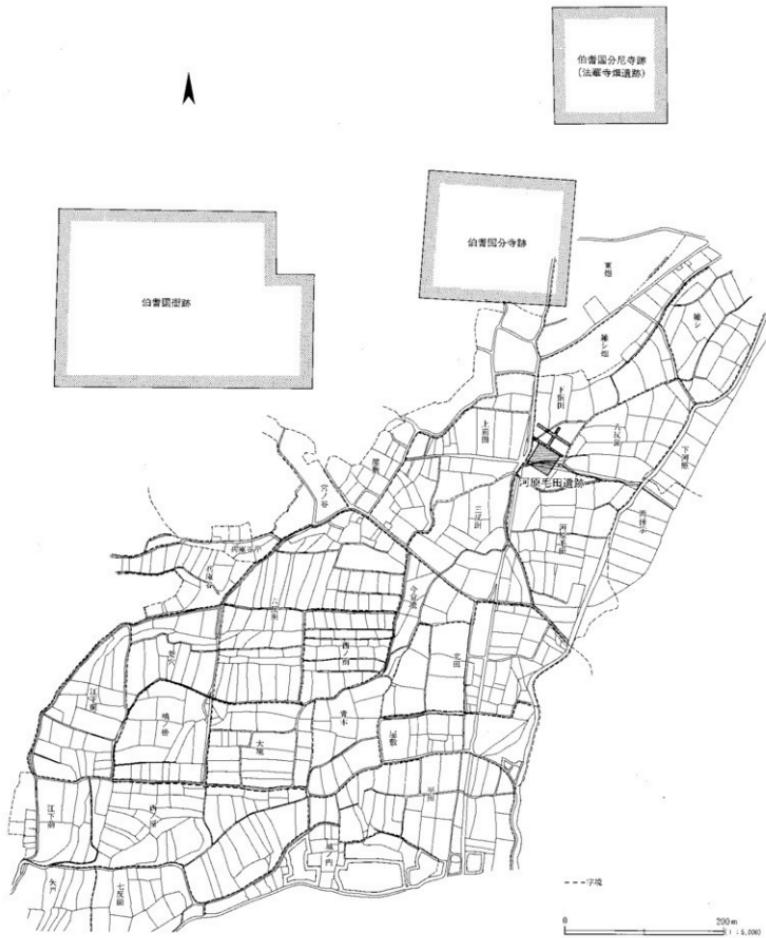
水路

検出した水路は3条である。これらは水路の方向から1号水路と2号水路、そして3号水路の2系統の水路に区別することができる。1号水路と2号水路は、緩やかに湾曲するものの東から西へ流れる流路を有するものであり、その検出状況から2号水路から1号水路へ付け替えられた可能性も考えられる。1号水路は、明治時代の字限図によると、近年のは場整備によって姿を消した旧水田の水路であることが確認できた。さらに調査区西側では水路の上を道路が横切っており、検出した1号水路で確認した丸太材の存在する部分がちょうど字限図に記された道路部分の可能性が伺える。また3号水路は、断面観察によって1号・2号水路より古いことが確認できた。このことは先の字限図には表現されておらず、やはり調査の状況を裏付けるものといえる。遺構に伴う出土遺物は少なく、水路の時期の決定要素を欠いている。今回検出したこれらの水路は、明治時代の字限図に見られる水路や溝と符合しており、今後条里を考える上で大きな役割をもつものではなかろうか。

以上、今回の調査によって検出した溝と水路についてその概要を述べたが、いずれも出土遺物を伴っておらず、また部分的な確認のためより明確なことは明らかにできなかった。しかし今回調査で伯耆国府内において道状遺構の存在を物語る資料を得ることができた。今後は、山陰道などの古代主要官道との関連が明らかにされることを期待する。

参考文献

- 佐藤英治他 「伯耆国分寺発掘調査報告1」 倉吉市教育委員会 1971
名越 勉 「伊勢野遺跡群予備調査報告書」 東伯町教育委員会 1979
金子裕之他 「伯耆国府跡発掘調査概報(第5・6次)」 倉吉市教育委員会 1979
眞田廣幸 「奈良・平安時代『新編倉吉市史』」 倉吉市 1996



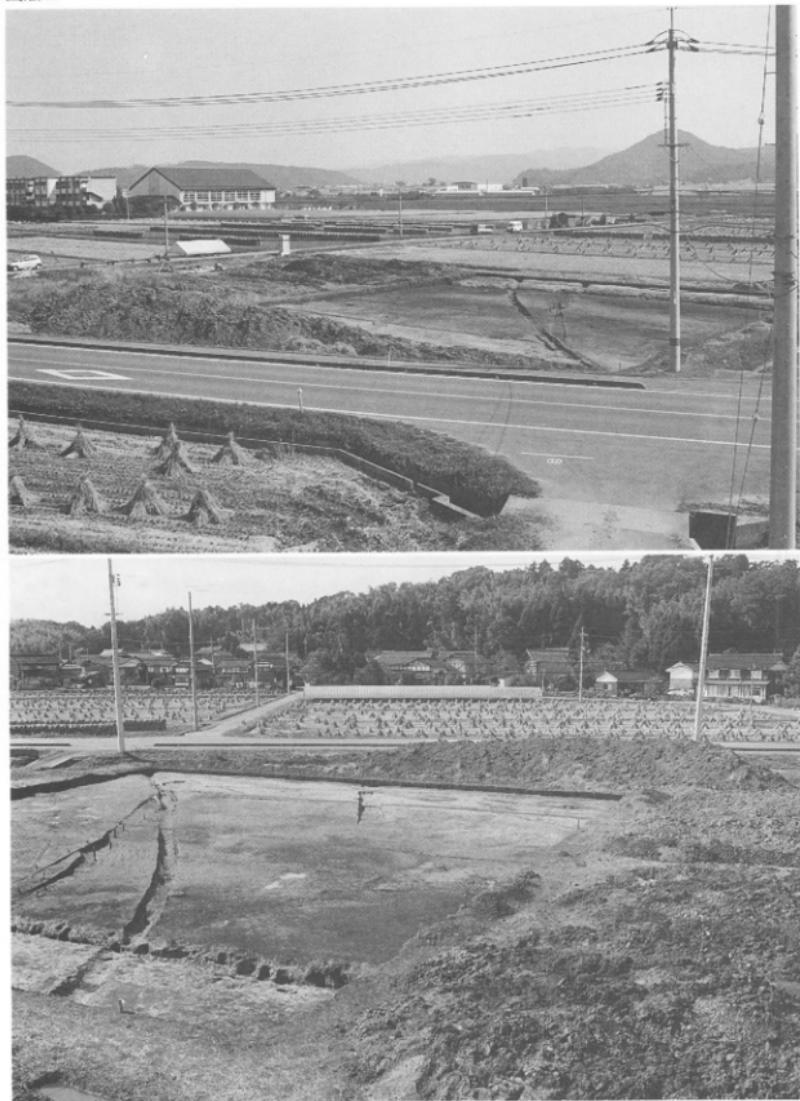
第7図 伯耆国府域における字限図



△調査区遠景（北東から）

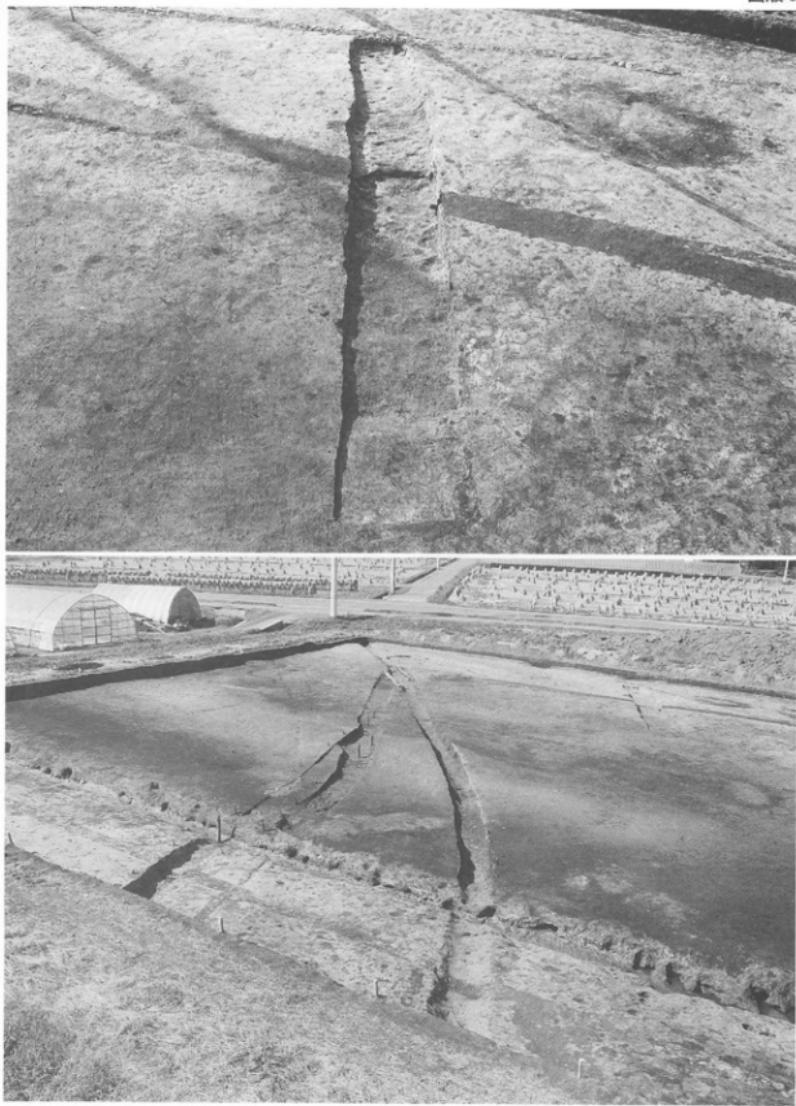
▽調査区全景（南東から）

図版 2



△調査区から東を望む（西から）

▽調査区から西を望む（東から）



△ S D01 (東から)

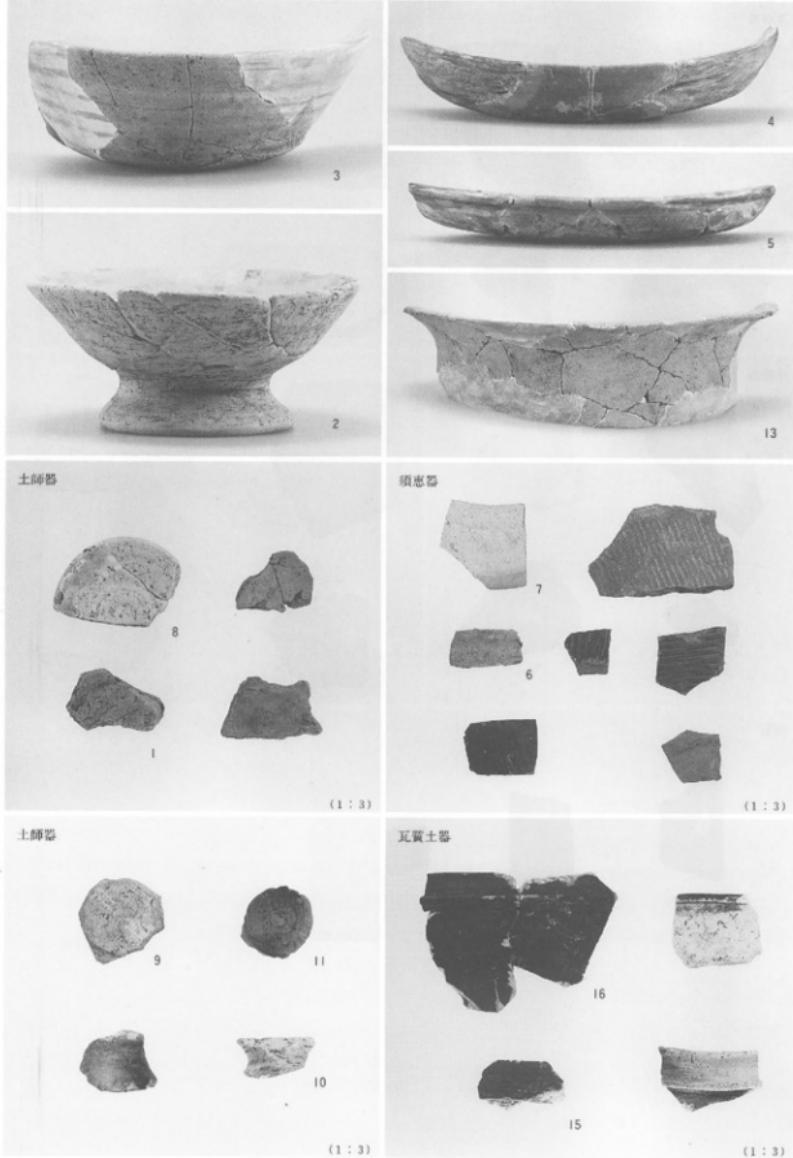
▽ 1号・2号水路 (東から)

図版 4



△ 3号水路 (南西から)

▽落し穴 (西から)



図版 6

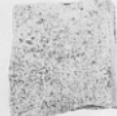
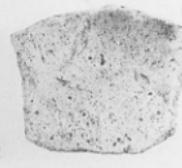
陶磁器・瓦・砾石

陶磁器

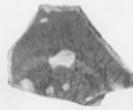


(1 : 3)

瓦



陶磁器



(1 : 3)

瓦



砾石



(1 : 2)

210.2
Kur
(96)
図書館

報告書抄録

著 名	河原毛田遺跡発掘調査報告書						
調 命 名	――						
機 次	――						
シリーズ名	金古市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第96号						
編 著 者 名	森下哲哉						
編集機関	金古市教育委員会						
所 在 地	〒682-8811 鳥取県金古市安町722番地 TEL 0858-22-4419						
発 行 年 月 日	西暦1998年3月21日						
所収遺跡名	所 在 地	ロード 沿村村：道路地号	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
河原毛田遺跡	鳥取県金古市安町 河原毛田	31203：6 WKK	35°25'32"	132°47'36"	1997年2月～1997年3月	900	社コミニティセンター建設事業に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項			
河原毛田遺跡	遺 墓	奈良～平安：溝状墓構 2条	土葬器・土師質土器・埴輪器・陶器器・軒瓦	平行する2条の溝を検出した。これは道路の側溝と考えられる。 東側溝構に伴う水路の確認。			
		水路 3条					
	土壤	縄文	：落し穴 1基				

河原毛田遺跡発掘調査報告書

平成10年3月31日 印刷
平成10年3月31日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会

印刷 製本 山本印刷株式会社